

郷土室だより

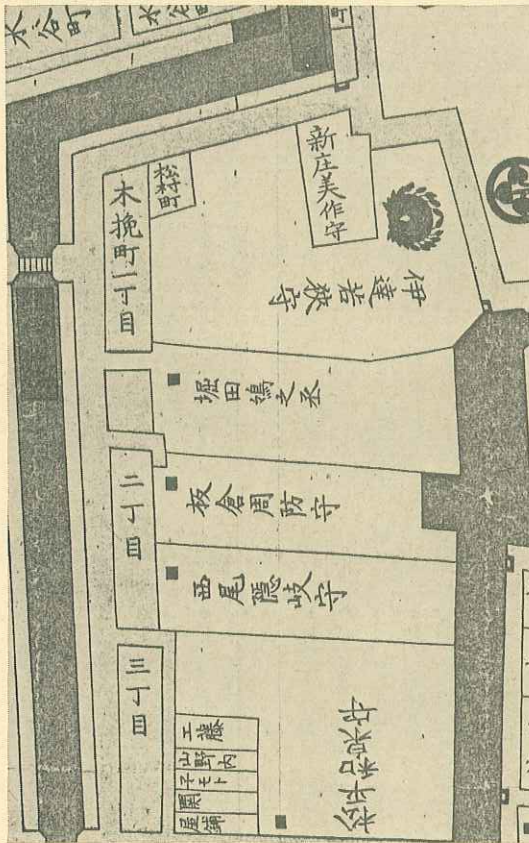
切絵図考証 一三三

安 藤 菊 二

木挽町一・二丁目(続き)

前回到引続いて、○伊予国宇和島支藩吉田の伊達若狭守―同藩御抱え医者本間游清―新庄美作守―板倉周防守―佐倉候堀田家―藩医藤倉元龍―浅井忠―西尾隠岐守のことなどを記そう。

○伊達若狭守



文久元年 尾張屋版切絵図(部分)

当主は宗孝。柳の間詰、朝散丈夫。天保一四卯年六月家督を嗣いだ。(実は山口内匠の弟)伊予国(愛媛県)宇和島藩(一〇万石)の支藩(吉田藩)で三万石を食んだ。『列藩要鑑』に

明暦三年宗主宗利の弟宗純、封内三万石を分食して吉田城を治む。爾後子孫世襲し、八世二百余年、宗孝に至り、王政維新となる。元年七月宗孝致仕し、養子宗敬嗣ぎ、二年六月吉田藩知事に任ぜらる。とある。この吉田藩伊達家の上屋敷については『藩邸沿革』に、

上屋敷 南八丁堀
拝領万治元年月不詳。相对替困込元禄十五

年十二月、宝暦三年三月、天保十四年八月添地拝領、元禄十五年十二月天保五年七月、安政元年五月、坪数六千貳百七拾六坪
拜領年度伊達家記録ニ拠ル。

府内沿革図書、延宝之頃、相引橋西之方伊達宮内少輔、新庄長門守屋敷有之、両屋敷西之方道向南之方加々爪次郎右衛門、北之方松崎権右衛門屋敷有之、権右衛門屋敷は元禄十五年相对替ニテ伊達和泉守屋敷ニ成。次郎右衛門屋敷ハ宝暦三年同断ニテ伊達紀守屋敷ニ成。

伊達家記録、元禄十五壬午年十二月九日、上屋敷前河岸地百拾七坪并揚場拾壹坪余添地窺済。

府内沿革図書、天保十四年八月地続牧野式部屋敷相对替ニテ伊達伊織一ト屋敷ニ成。(中略)

伊達家記録、明治三庚午年十月三日届、南八丁堀私邸六千貳百七拾九坪。(市史稿、市街編49―154〇頁)と記してある。

○本間游清(一七八〇―一八五〇)

伊予国宇和島藩の支藩吉田藩伊達家お抱えの医者で、南八丁堀の伊達家上屋敷内に居住していた。

游清、字は士竜、眠雲と称し、九江とも殊庵主人とも号した。儒学を古屋

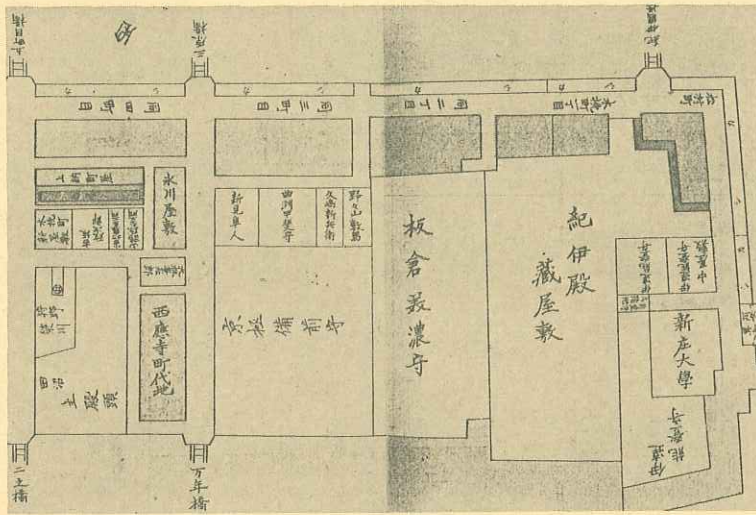
り詳しいことは判明しなかったが、元龍が弘化三年に町医師昆秦中の子元秀を養子に迎えていたという一事が私の興味を呼び起した。昆秦仲の名は、この切絵図考証第二回、村松町の条にその名が見え、私はその人が小石川療養所に勤務する医師であったことを記しておいた。渡辺刀水翁の研究によると秦仲は、武州与野の農家の出身で、細井平洲に学び、郷党の教育に従った、大備西沢曠野の子であった。曠野の長男は蘭陵と号して詩文に長じ、足跡天下に遍かったといひ、蘭陵の弟常は、字は子典、潤齋と号し、医を二宮桃亭に学んで、昆秦庵の養子となり、秦仲と称して、江戸の町医となった。とい

う。かく記し来って、刀水翁は、次のような秘話を記される。
此人（秦仲）も詩文に長じ、医術に長じ、且つ人物も余程しつかりして居たものと見えて、幕末の俊傑小笠原圖書頭長行から深く信頼せられたのである。
小笠原長行は即ち肥前唐津の明山公子の名をもって世に知られた。幕府の老中にもなったが、維新の際方向を誤り王師に抗し、明治元年遂に姿を消すに至った。其の地下に潜伏する時一子の保全を昆秦仲に托した。

一子と云つても其時は未だ生れてはいない。愛妾松田氏の腹に在ったのである。松田氏は高崎藩備松田迂仙の女で、迂仙は明山公子に学を教え其関係は深かったのである。秦仲は未生の児を托されたが、松田氏の男子を挙げた時は秦仲己に歿し世になかった。そこで藤倉元秀が母子を伴つて佐倉の領分に遁れ安全に保護を加えて生長したのが、後の海軍中将子爵小笠原長生閣下であるという。元秀は秦仲の高弟と私は聞いていたが、依田翁の示教になつて、元秀は昆秦仲の子で、藤倉元龍の養子であることが分つた。又元秀が松田氏母子を佐倉領に伴つたことも、藤倉が佐倉藩医であるから、其下総に逃れたことも合点がいった。
刀水翁が藤倉元龍の伝記の調査を試みられたのは、翁が昭和十年の暮に、元龍の詩稿を手入れされたからで、それは天保七年から天保九年まで、得るに従つて書付けた自筆稿本であるとしてその内容を紹介されたのであつた。

その詩稿、天保七年正月三日の条に市河米庵の弟で、鑄木氏を嗣ぎ、画を善した鑄木雲潭が、「梅花老猿図」を作つて、元龍の還暦の祝として贈つてきたことが記してある。元龍は申歳の生れだつたからである。
鑄木雲潭の居宅は、元龍の住居に近い木挽町三丁目にあつた。このあと、三丁目の条でそのことを記そう。
○浅井 忠
佐倉藩士で名を成した人に、洋画家浅井忠がある。
「安政三年（一八五〇）六月二日、佐倉藩士浅井伊織の長男として、江戸木挽町の藩邸で生まれた。浅井の家は代々堀田家に仕え番頭役や年寄役をつとめる家柄であつた。文久三年父伊織と祖父とを相次いで失ひ、八才で家督を継ぎ、一家は江戸を引あげて佐倉に移つた」（原田夷一近代洋画の青春傳）
○板倉周防守
木挽町二丁目の板倉家は、備中松山藩五万石の藩主。「御府内沿革図書」を検すると、延宝の板倉隠岐守から文久二年の板倉周防守まで、動くことなくこの地にあつたことが知れる。
沿革図書は、板倉隠岐守の屋敷の条に注して

○当時周防守。○板倉重冬、貞享三年十二月周防守に任じ、宝永六年卒。享保三年は近江守重治、同十五年は新十郎勝澄なり。明和六年十二月勝從隠岐守に任じ、安永六年日向守に改め、同七年二月卒。左近勝政継、同八年十二月左近將監に任ず。充之進勝職文政元年十二月阿波守、後周防守に改む。
と記している。切絵図に記す周防守は勝静であろう。桑名藩主松平定永の八男で、幼名は寧八郎、また万之進・新などと称した。
天保十三年備中松山藩主板倉勝職の養子となり、弘化二年十二月従五位下左近將監に叙任、嘉永二年閏四月襲封、周防守と称した。資性温良にして恭謙、力を治民に尽し、藩祖勝重ならびに、外祖父松平定信の遺風を継ぎ、文武共に興し、政績があらわれた。云々（『明治維新人名辞典』）
勝静の維新前後の事績は割愛したが、必要の向は、同書の記述を参照された。松山藩については『列藩要鑑』に板倉氏は源姓なり、後松平氏に仕えて勝重に至る。勝重少時出家して僧となる。天正二年家康の命を以て還俗す。三年家康の駿府に移るに及んで町奉行となる。慶長五年京都所司代の副となり、侯籍に入り、叙爵して伊賀守と称し、所司代に進む。元和年中其子周防守重家父に代りて所司代に補せらる。
下総関宿、勢州龜山城、志州鳥羽城を経て、備中松山城に移封して勝静



「御府内沿革図書 京橋之部」安永年中

に至る。明治元年王師に抗し官位を褫奪さる。二年八月赦を得て蟄居され、更に従弟勝弼に二万石を賜ふて家を継がしめ、高知藩知事に任ず、と記してある。

第27 木挽町三丁目

この町については、京極主膳屋敷―西尾隠岐守―松平和泉守―木挽町三丁目町地裏(浅野大学の拝領屋敷)―木挽町四丁目代地―春木南湖―同南濱―同南華―山内熊之助(香雪)―細川越中守―根本愚洲―立野竜貞―以上の順で筆を進める。

○京極主膳屋敷

木挽町二丁目から三丁目にかけての土地は、寛永図以来ずっと京極主膳もしくは京極主膳正の名が記されている。

京極家は、讃岐丸亀藩主京極佐渡守・但馬豊岡藩の京極飛騨守、讃州多度藩の京極下総守と、丹後峰山藩の京極主膳正の家との四家があった。峰山藩の礎高は一万一四四石である。峰山藩の歴史は『列藩要覧』に、

京極氏は丸亀京極氏の支族なり。主膳正高通を以て祖

となす。高知の第二子元和六年父封内一万三千石を分受して丹波峯山城に移治され、爾後十数世子孫世襲して高富に至る。明治元年高富致仕して、養子備中守高陳嗣ぎ、二年六月峰上藩知事となる。

一、上屋敷 木挽町

拜領年月不詳。唱替天明八年六月廿八日、坪数六八六六坪、寛永以降各地図及諸武鑑に載す。坪数は後文によりて算出す。

文化九年十二月二十九日、三三三二坪を井伊兵部少輔え
文化十一年六月二十二日、曲淵甲斐守拝領屋敷木挽町一四五〇坪の内

二〇〇坪京極周防守え
文政十一年十二月二十八日、西尾隠岐守下屋敷木挽町六七九坪余京極上総介え、同人中屋敷同所三五六二坪余西尾隠岐守え、相對替と記してあるから、文化九年に井伊兵部少輔え三三三二坪を割き、文政十一年十二月二十八日に、木挽町中屋敷の三五六二坪を西尾隠岐守え讓渡してこの地を去ったのであった。

○西尾隠岐守

安政六年版『大成武鑑』に、御奏者番、芙蓉間、三万五千石西尾隠岐守と記

載する。居城は連州城東郡横須賀。文政十一年に京極家の邸地を得たことは前記のごとくだ。

○松平和泉守

參州幡豆郡西尾、六万石の城主。『列藩要覧』に云う。

松本氏は其祖加賀守乘元なり。乘元初め參州荻生に居り、因て荻生松本氏と称す。荻生又大給と書す。乘元乗正、乗勝、親乘、真乘、子々相伝へて荻生に居る。真乗の子家乘徳川家康に仕へ一万石を領して上州那波に居る。慶長六年閑原役の功を以て万石を加封され濃州岩村に移封す。寛永十五年乘寿一万五千石を加封され、遠州浜松城に転治し、正保二年二万石を加封し上州館林に移る。其後各地に移封し、承保十五年老中となり、加封されて通封六万八千石となる。延享二年一万石を削られ出羽山形に移封す。明和元年乗佑大坂城代となり參州西尾に転封す。爾後子孫相伝へて乗秩に至り、維新と為る。

明治二年六月西尾藩知事に任ず。幕末の頃活躍した、松平和泉守は、乗全である。

弘化元年十二月大坂城代となり、二年三月西丸老中となる。ついで嘉永元年十月本城の老中に移り、安政二

年八月辞任、同五年六月再任、万延元年五月病により免職、帝鑑問詰を仰せつけられた。〔日本近世国民史〕三〇巻

○木挽町三丁目町地裏

木挽町三丁目は、延宝図を見ると、町地裏に小出甚左衛門と朽木弥五兵衛の屋敷が並び、その東方は全て京極主膳正の屋敷がこれを占めている。この小出・朽木両家の屋敷のあったあたりに、元禄の頃、浅野内匠頭の舎弟浅野大学長広の拝領屋敷があった。

浅野大学は、元禄七年に兄内匠頭から新田三千石を分けられ、幕府の旗本となり、三千石に列し、木挽町三丁目に屋敷を拝領していたのである。

元禄十四年（一七〇〇）三月十四日、勅使饗応役だった兄の浅野内匠頭長矩が私の遺恨から、指南役の高家吉良義史を殿中松の廊下において斬付けたためその身は即日切腹を仰付られ、知行所は没収という厳しい処分を受けた。

大学は内匠頭の養子なので、事件に連座して閉門を命ぜられた。

今ここで忠臣蔵の顛末を語っても始まらぬが、赤穂の遺臣達がひたすら願っていた大学による浅野家再興策はついにみられず、元禄一五年七月十八日大学は、若年寄加藤越中守の役宅に呼

び出されて、閉門は御免となったが、「松平安芸守方へ引き取られ、芸州へ差遣すべし」という申渡しを受けた。

大学はその日桜田門外の浅野邸に引取られ、大学の妻子と多数の家来は、その晩浅野邸に引移り、木挽町屋敷は召上られて、一時松平駿河守にお預けになった。大学は七月十八日に安芸国広島へ出発し八月十五日には、この邸地は挙母藩（旧封式万石）内藤山城守に与えられた。市史稿の「藩邸沿革」挙母藩の条に、

一、中屋敷 木挽町三丁目

内藤家記録、元禄十五年浅野大学木挽町屋敷千九拾坪受領。

屋敷書抜、元禄十五年八月十三日渡木挽町三丁目裏通千九拾坪。内藤山城守。

と記してある。もともと、内藤家も久しくはこの屋敷には住まず、正徳二年閏五月二日、本所法恩寺前本多遠江守屋敷式千坪と、この木挽町の屋敷を交換して、本所へ移ってしまった。（市史稿 市街篇49一七七八頁）『御府内沿革草書』によると、宝暦頃の図三丁目町裏に本多遠江守の邸が載っており、この地はさかのぼって延宝の頃には朽木弥五兵衛の屋敷だったことがわかる。

○木挽町四丁目代地

木挽町三丁目町裏に、内藤山城守の屋敷があった頃、その北隣に竜野藩主脇坂淡路守の下屋敷があった。享保三年八月この両家屋敷上ヶ地の内六七九坪が、取払いとなった木挽町四丁目町屋分の代地として下げ渡されている。（市49一五八六―七頁）

しかし同十年にはこの四丁目代地は元地に立戻り、跡地はまたもとの武家の小屋敷の並ぶ所となった。

嘉永六年近吾堂版切絵図の、三丁目西尾家中屋敷の西南角地に、春木南渥



と山内熊之助（香雪）の屋敷のあることが示されている。

春木南渥は画家南湖の子で、父の代から木挽町三丁目に居住していた。

○春木南湖

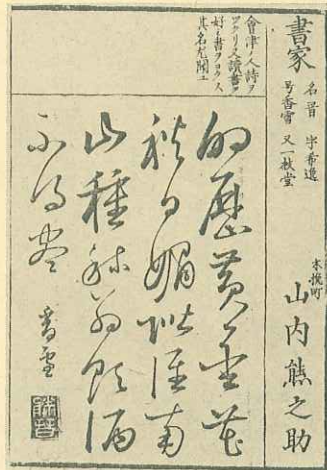
名は鯉、字は子魚、通称は門弥とい、別号を幽石亭、呑墨翁、烟霞釣叟、烟霞漁叟など称した。江戸の人で、伊勢津藩の増山雪齋侯に仕え、大阪の木村兼葭堂の門に学び、山水花鳥を得意とし、雪齋侯や兼葭堂に学費を与えられて長崎に学び、清人費西湖より画法を教えられた。谷文晁と並んで、当時の南画の大家だった。子の南渥、西湖、孫の南華、ともに南湖のあとをついで、画家として家系を守った。宝暦九年（一七五九）に生れ、天保十年（一八三九）四月二十五日、かぞえ年八十一才でなくなった。（佐藤鶴子、『日本名画家伝』）

○春木南渥

南湖の子で、名は秀熙又は俊、竜、字は敬、又は子緝といい、通称は卵之助別号を耕雲樵者・耕雲漁者・呑山楼などといった。江戸の人で、画は父南湖より教えをうけ、山水・花鳥を得意とした。江戸末期から明治初期における南画の名家で、田崎草雲なども南渥にいろいろ教えられたという。寛政七年

「江戸文人寿命附」より

書画薈粹 (天保三年) 畑銀雞著



(二七九五) に生れ、明治十一年 (一八七〇) 十二月十一日 かぞえ年八十四才で没した。(『日本名画家伝』による)

森銃三先生の「著作堂を訪うた人々」という報文によると、早大図書館所蔵、曲亭馬琴の遺書の内の「瀧沢家訪問往来人名簿」に

築地増山河内守殿家中、唐画師南溟と見えているれうである。(著作集巻四、四七六頁)

南溟も父と同じく増山侯の恩顧を受けていたのであった。増山河内守の屋敷は築地三之橋、現在のガンセンターの所にあつたから、祇侯するに便宜がよかつたことがわかる。

○春木南華

南溟の子で、名は鱗、通称扇之助、別号を絵画斎、烟波漁徒などという。画は父より教えをうけ花鳥山水を得意とした。惜しいことに父より先に没した。文政二年 (一八一九) に生れ 慶応二年 (一八六〇) 六月十七日 かぞえ年四十八才で没した。(『日本名画家伝』)

○山内熊之助

書家、号は香雪。名は晉、字は希逸、別に一枝堂とも号した。会津の人。二十三才江戸に出で、亀田鵬斎、大窪詩仏に教えをうけ、市河米庵の門に入り

渡した。大久保加賀守の邸地は、嘉永二年の頃に

は、細川越中守の邸地となつている。越中守は斉護、従四位上中将、肥後熊本五十四万石の大王。くだくだしく述べるまでもあるまい。

三丁目の細川越中守下屋敷地続き西角町裏に、木村検校・根本愚洲・立野竜貞・上月玄秀の名が

刻まれている。木村検校については聞く所はない。

○根本愚洲

画家。名溥器、字子成、秋谷淡処画屋と号した。二本松藩士である。愚洲の男、愚溪も画を能くし、父と同居していた。名は兼虎、字端卿と、文久元年版『諸家人名録』にある。

○立野竜貞

文久三年版『諸家人名録』に、儒医、南堂、名は敬之、字は子履。と記し、明治七年刊『東京独案内』に

立野竜貞 産家 第一大区十小区木挽町三丁目三番地

と載せる。

◇ 東京を語る会 第36回

日時 七月三日 (土)

午後二時～四時

演題 半七捕物帳をたずねて

講師 今井 金吾氏

(江戸研究家)

岡本綺堂作「半七捕物帖」の舞台に登場する江戸日本橋などを中心に今井金吾氏にお話ししていただきます。先生は、「詳説江戸名所記」「東京の街道を歩く」等のご著書で江戸の町を、道を、再現しておられます。

お誘い合せの上、ご来場下さい。

受贈資料

沼尻長治氏より、都市製図社発行の戦前、戦後にわたる中央区関係の地図が多数寄贈されました。

この地図は、火保図と呼ばれるもので、現在の住宅地図と同様、各戸の記入に加え、その建物の耐火構造、木造等の判別も可能な詳細なものです。

戦前分は、昭和八～九年発行のもので、京橋区四十枚・日本橋区三十枚あり、戦前の街の様子を知るのに大変役立つことと思います。